

体育の「越境的な学習」についての実践的研究

—小学5年体育授業を通して—

竹内 隆二

Practical study of “Cross-Boundary Learning” of Physical Education

— In the Elementary School Five Grades Physical Education Class —

Ryuji TAKEUCHI

1 問題と目的

平成29年度の告示の小学校学習指導要領を受け、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けたあらゆる手段を用いた授業実践が行われるようになった。しかし、そのほとんどは、規程のカリキュラムの中で定められた目標を達成させる教育観、そしてそれが規程の時間割、学校、学年、学級という固定された中で行われている為、手段の目的化になってしまっていると考えた。筆者は、この固定された中で、繰り返し授業を行うことが、劣等感や嫌悪感を育むことにつながり、それが、主体的な学びを阻害していると捉えている。これらのことから、教育課程の在り方を見直す必要があるのではないかと考えた。

そこで本研究では、その固定を解除し、「主体的・対話的で深い学び」のために、ビジネスパーソンや企業の間で行われている「越境的学習」¹⁾を参考に「越境的な学習」を体育授業に取り入れ実践を行う。このことが、先述の問題に対して、どのように作用するのかを探り、その成果を明らかにすることが、本研究の目的である。

2 「越境的な学習」の学習観

「越境的な学習」の学習観は、エンゲストロームの「活動理論」²⁾とレイヴとウエンガーの「状況論」³⁾に基づくものである。

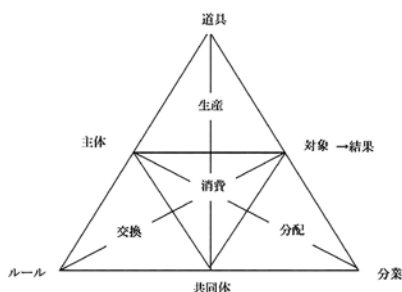


図1 人間活動の構造

(エンゲストローム「拡張による学習」p79)

「活動理論」は、図1の構造図で示される。このように、エンゲストロームは、学校や職場などの社会を1つの活動システムとして捉え、その中に学びがあるとしている。

「状況論」はレイヴとウエンガーによって提唱され、社会的関わり合いで学習が生起するかに注目をした理論である。状況論の学習は「正統的周辺参加」⁴⁾(以下LPPと表す)という。LPPでの学習は、状況の中の実践にあると考えられ、このような状況を有する集団を「実践共同体」⁵⁾と呼ぶ。

「越境的学習」の過程は、「自文化の自覚(当たり前が当たり前ではないことに気づく)」「自文化の動揺(当たり前が揺さぶられる状態)」「異文化専有(行為やアイデンティティの変化)」⁶⁾とされ、異なる「実践共同体」に属し、ある共同体の実践を他の共同体に伝播する存在を「知識の仲介者(ナレッジ・ブローカー)」⁷⁾と呼ぶ。

3 実践I —小5と中2の器械運動(マット運動)—

3-1 研究方法

小学校5年生と中学校2年生による器械運動(マット運動)の授業をM中学校で実施し、授業後のリフレクションシート、活動を撮影した動画や静止画、さらには筆者自身の観察記述から、「越境的な学習」を取り入れた体育授業の成果について考察する。

3-1-1 実践内容・対象

『手について』と『手をつかないで』回った時のちがいは何か」というクエスチョンを筆者が与え、前転をスモールステップ化した授業を2時間行った。実践対象者は小学5年生(30名)と中学2年生(38名)、授業は筆者が行った。

3-2 結果と考察



図2 小5と中2で一緒に活動する様子

第1時、全体交流の中で、小学生から「手をつくると速い、つかないとゆっくり」という意見が出た。これに対し、中学生のリフレクションシートには、肯定否定のどちらの考えも書かれていた。

第2時に、1時の意見を確かめる活動を行った。すると、肯定していた意見が変化した。このことから、小学生の意見に影響を受けたと推察した。さらに中学生の感想に、表1のような記述が見られた。

表1 中学生のリフレクションシートの結果

15	小学生としかわかり合えないようなマット運動で回る時どうしたらいいかなど他にも言い切れないほどの楽しいことを学ばせていただきました。
37	小学生たちが一緒に授業を行ったことで自分(中学生)たちが気づけなかったことに気づいていて小学生をすごいと思いました。

15番生徒にとっては、「小学生としかわかり合えない・学べた」、37番生徒は、「小学生が中学生の気づけなかったことに気づいていてすごい」という感想をもっている。このように、小学生の発言が中学生に影響を及ぼしたり、中学生にとって情報量が増加したりしたことから、中学生が主体的に学べたと推察した。

表2 44番児童のリフレクションシート

44	マット運動では、ゆっくり回るとバランスをくずしやすく、立つのが大変。逆に、速く回ると立つのが簡単だということがわかった。
----	--------------------------------------------------------------

この内容から、児童が、手をつく、つかないがバランスや立つことに関係しているのではなく、回転速度がそれに影響を与えているということに気づけたと推察した。つまり、小学生にとっても情報量が増加したり、中学生の意見に影響を受けたりして、新たな考えにつながったことが推察される。

この他にも、以下のような記述をした児童がいた。

表3 14番児童のリフレクションシート

14	2回やってマット運動の新しい楽しさに気づけたなと思います。
----	-------------------------------

下線部について後日尋ねると「今までやってきたマット運動はこういう技をやります。と言われて、それをやってきたから、できないこともあったから。(技が)できたら楽しいけど。今回は(小学生と中学生)みんなで手をついた、つかない、

を研究しているみたいだし、中学生の意見も聞けて楽しかった。」と述べた。中学生の中にも「私はマットが難しくて苦手だったけど、仲良くやれて良かった。私も楽しくできてよかった。」と感想を書いている生徒がいた。

3-3 まとめ

「越境的な学習」を取り入れた小5と中2のマット運動では、小学生中学生の双方に情報量の増加、新たな気づきや学びが生まれたこと。さらにマット運動で、できない技があり劣等感を抱いていた可能性のある子や、苦手意識をもっていた子にとっても楽しく、主体的に学べる可能性があると考えた。

4 実践Ⅱ -小5と小1の陸上運動(リレー)-

4-1 研究方法

小学校5年生と小学校1年生による陸上運動(リレー)の授業をT小学校で実施し、授業後のリフレクションシート、活動を撮影した動画や静止画、さらには筆者自身の観察記述から、「越境的な学習」を取り入れた体育授業の成果について考察する。

4-1-1 実践内容・対象

本実践は、1、5年生合同の3人1チームで75M(1人25M)のリレーを、オールレースで計画した。実践対象者は小学5年生(30名)と小学1年生(27名)、授業は筆者が行った。

4-2 結果と考察

授業中、筆者に話しかけに来た児童がいる。以下、その時の会話記録である。

C: 先生、ずっと競争しないとダメ?
T: なんで?
C: バトンバスの練習がしたいんだけど・
T: 相手チームが良いよって言えば、構いませんよ。
C: よっしゃ。じゃあ聞いてみよ。

この後、13番児童は、1年生とともにバトンバスの練習を自主的に始めた(図4)。



図4 バトンバスの練習を行う13番児童

尚、この児童のリレーや短距離走に対するイメージ変化を表4に示す。

表4 13番児童のリレーや短距離走のイメージ変化

13	(これまでのリレーや短距離走は) 嫌い、スタミナがなくなるし、走ってもどうせ負けるし、負けたくないから。
	(実践後、リレーは好きでも嫌いでも) どちらでもない。(1年生にいろいろ伝えるのが) めんどくさいのと、楽しいのが同じくらいだったから。リレーや競争は意外に楽しい一面もあるんだと思った。

このことから、リレーを「嫌い」「どうせ負ける」といった諦めの感情を抱えている児童にとっても、この実践を通してこれらのアイデンティティに変容が見られたと考えた。

さらに、1、5年生それぞれのリフレクションシートには「バトンパスをもっと練習すれば…」といったような、自チームの課題を見つけたと考えられる記述が見られた。その他にも、以下のような記述が見られた。

表5 工夫を講じた5年生

6	順番やハンデ、バトンの受け渡しなどで、相手チームとの差が変わってすごい良い勝負になって面白いリレーができた。
---	--------------------------------------------------------

この内容から、異年齢の子とのリレーの楽しみ方など、新たな気づき、考えが生まれたと推察した。

表6 バトンの受け取り方を見つけた1年生

6	バトンをとるときにはまえをむいて、うしろにてをやればできる。
---	--------------------------------

この内容から、1年生はレースを繰り返す行方を通して、バトンの受け取り方を見つけた可能性があったと考えた。

4-3 まとめ

「越境的な学習」を取り入れた小1と小5のリレーでは、これまでのリレーに対するイメージが多くの5年児童にとって変わったという結果が得られた。リレーに対して諦めのような感情を抱いていた子もいたが、それが変容する「異文化専有」が起こったと推察できる。さらに、1年生にとってはバトンの受け取り方、5年生にとっては、異年齢の子とのリレーの楽しみ方など、新たな気づき、考え方が生まれている。つまり、双方にとって学びが生まれたことが示唆された。

5 実践Ⅲ 小5とデフリンピック選手らによるボール運動(ネット型)ー

5-1 研究方法

小学5年生とデフリンピック選手らによるボール運動(ネット型)の授業をT小学校で実施し、

授業後のリフレクションシート、活動を撮影した動画や静止画、さらには筆者自身の観察記述から、「越境的な学習」を取り入れた体育授業の成果について考察する。

5-1-1 実践内容・対象

5年生はこれまでに、キャッチバレーボールの授業を6時間経験している。単元は7時間完了で、第1時からオールゲームで構成した。5年生は3人1チームでキャッチ可、デフリンピック選手らは2人1チームで通常のバレーボールルールでゲームを行った。実践対象者は小学5年生(30名)とデフリンピック選手ら(7名)、授業は筆者が行った。



図5 ゲームのようす

5-2 結果と考察

学級で行った6時間で、「相手のいないところをねらう」という気づきが、1人から生まれていたが、広まりがなかった。しかし本実践で、この気づきは多くの児童に生まれた。さらに「3回ボールが回っている間に態勢を整えている」という記述からは、授業で触れていない三段攻撃についても、対戦相手のプレーを見て、その意味や意図に気づけた児童がいる可能性があると考えた。

表7 デフリンピック選手らのメール内容の抜粋

デフリンピック選手	どうしたら個人差関係なく子どもたちが楽しめるだろうと考えながらバレーを試してみた(中略)子どもたちとの接し方についても大変良い勉強になりました。今日は、子どもたちから学ぶことがあり、とても良い体験をさせていただきました。
バレーボール部の方	徐々に点を取れる方法を考え、工夫する子が数名いました。すぐに実践し、吸収が早いことも感じました。子どもたちに考えさせ、工夫させるという授業は、とても良い取り組みだと思います。私も職場で取り入れてみます。

「どうしたら個人差関係なく子どもたちが楽しめるだろうと考えながら……」とある。これは、実践Ⅱの小5が小1と楽しめるよう工夫を講じたことに通ずるものがあると考えた。さらに、「接し方についても(中略)学ぶことがあり……」とあった。下線部より、接し方だけでなく、他の点についても勉強になり、子どもたちから学べたと

いう結果が得られた。また、「徐々に点を取れる方法を考え、工夫する子が数名いました……子どもたちに考えさせ、工夫させるという授業は、とても良い取り組みだと思います。私も職場で取り入れてみます。」という記述がある。つまりこれは、子どもたちが考え、工夫が現れていることに気づき、そこから良さや手ごたえを感じたことがうかがえる。このことから、「経験、学びを別の実践共同体に伝播する知識の仲介者(ナレッジ・ブローカー)」が出現する可能性が推察された。

5-3 まとめ

「越境的な学習」を取り入れた小5とデフリンピック選手らのボール運動(ネット型)では、5年生にとっては、相手のいないところをねらうことや、三段攻撃の意味や意図が学べた可能性があること、一方、デフリンピック選手らも、子どもとの接し方をはじめ、学びが生まれ、「知識の仲介者(ナレッジ・ブローカー)」が出現する可能性が示唆された。

6 まとめ

本研究では、固定された学級、学年のみの体育では、子どもが劣等感を抱き、それが「主体的・対話的で深い学び」を阻害していることを問題視し、「越境的な学習」を体育授業に取り入れることで、その問題に対してどのように作用するのかを探り、成果を明らかにすることを目的とした。

実践Ⅰでは、進んで対話を行う様子が見られた。また、リフレクションシートに、それぞれの意見の影響が見られた点や、中学生の「自分たちが気づけていなかったことに気づいていて小学生をすごいと思いました」という記述が見られた点から、小中学生それぞれで情報量の増加、新たな気づきや学びが生まれた可能性があると考えた。さらに、苦手意識をもっていた子も、主体的に活動する様子がみられ、その結果、楽しんだり新たな楽しさに気づけたりしたことが推察された。

実践Ⅱでも、進んで対話をする様子が見られた。さらに、活動中の様子やリフレクションシートから、5年生は異年齢、技能差を理解した上で楽しむ工夫を講じたり、課題を見つけたりする姿が見られた。ある種これは、「豊かなスポーツライフを実現するための」8) 知識や技能を学んだと考えた。1年生はバトンの受け取り方や課題に気づいた。つまり対象は異なるものの1年、5年の双方にとっての学びが生まれたことが推察される。また、「どうせ負ける」と諦めのアイデンティティを抱えていた児童が、自ら課題を見付け、その改善に向けた練習を申し出て取り組んだり、「リレ-

は意外に楽しい」という記述が見られたりした。このことから、児童のアイデンティティに変容が見られたと考えた。

実践Ⅲでは、「相手のいないところをねらう」という点に気づいた児童が多くいた。さらに三段攻撃の意味や意図に気づいた児童がいた。デフリンピック選手の「どうしたら子どもたちが楽しめるだろうと考えた」という記述から、実践Ⅱの5年生が、異年齢、技能差を理解した上で楽しむ工夫を講じたことと同様の学びが生まれていると考えた。さらに小学生とデフリンピック選手らの双方に学びが生まれた可能性があるとして推察した。また、バレーボール部の方が「知識の仲介者(ナレッジ・ブローカー)」となる可能性が示唆された。

実践Ⅰ、Ⅱでは、進んで対話を行う様子が見られた。また、すべての実践で新たな気づきや発見が生まれ、情報量が増加したりするなど、双方に学びが生まれたことが推察された。これらは「越境的な学習」による「異文化専有」が起こったものとする。また、これまで育まれてきたある種の階層がなくなった。つまり、劣等感や嫌悪感を抱かない。もしくは、軽減されたことで楽しんで主体的に活動する姿が見られた。こちらも「自文化の動揺」もしくは、「異文化専有」が起こったことが推察される。これらのことから、「越境的な学習」を体育授業に取り入れることで、「主体的・対話的で深い学び」に向かう可能性があることが考えられた。

7 引用・参考文献

- 1) 石山恒貴著「越境的学習のメカニズム」福村出版, 2018, pp19-39
- 2) エンゲストローム著 山住勝広ら訳「拡張による学習-活動理論からのアプローチ」新曜社, 1999年
- 3) レイヴ, ウェンガー著 佐伯胖訳「状況に埋め込まれた学習-正統的周辺参加-」産業図書, 1993年
- 4) 前掲書3) pp1-12
- 5) E. ウェンガー, R. マクダーモットら著 櫻井祐子訳「コミュニティ・オブ・プラクティス-ナレッジ社会の新たな知識形態の実践-」翔泳社, 2002
- 6) 香川秀太, 青山征彦著「越境する対話と学び」新曜社, 2015, pp41-46
- 7) 上掲書1) pp93-106
- 8) 文部科学省: 小学校学習指導要領解説体育編, 2017, pp17-23

(指導教員 森 勇示)